

東洋文庫書報 第四七号 抜刷

平成二八年（二〇一六）三月

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十三）

——近代の学者・教授の蔵書印——

中善寺 慎

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十三）

— 近代の学者・教授の蔵書印 —

中善寺 慎

既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報42号
- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報43号

十 幕臣・藩士の蔵書印

書報44号

十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印

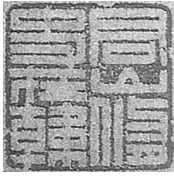
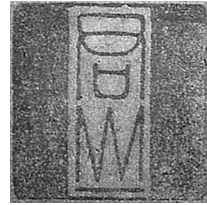
書報45号

十二 商賈・実業家・企業の蔵書印

書報46号

凡 例

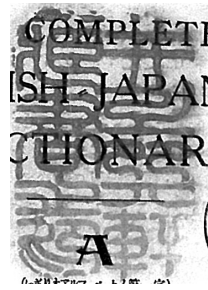
- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
 - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
 - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
 - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
 - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
 - 平凡社編『日本人名大事典』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



稲葉岩吉（一八七六一一九四〇）

大正・昭和期の東洋史学者。明治九年（一八七六）新潟県村上に小林正之の長男として生まれる。のち母の姓を継ぐ。号は君山。明治三十三年に高等商業学校附属外国語学校支那語部を卒業。早くから内藤湖南に師事し中国近代史・朝鮮史の研究を志す。明治三十五年より大阪商船会社漢口支店に勤務。明治四十一年から白鳥庫吉の指揮のもと満鉄歴史調査部で『満洲歴史地理』編纂に参加する。大正四年（一九一五）より陸軍大学校や山口高等商業学校で中国史の教鞭を執る。大正十一年には朝鮮総督府の朝鮮史編纂委員に転じ、大正十四年から朝鮮史編修会修史官。昭和十二年（一九三七）満洲建国大学教授となり、昭和十五年（一九四〇）新京に没す。著書は『北方支那』『満洲発達史』『朝鮮文化史研究』等。

- 〔岩印〕（9）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）
- 〔君山（小）〕（9）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）
- 〔君山（大）〕（30）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）
- 〔君山（中）〕（16）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）
- 〔君山遺品〕（31）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）
- 〔君山脩史在韓〕（25）
- 〔百二老人語録〕（MA二一八一三三）



井上哲次郎（一八五五—一九四四）

明治・大正期の東洋哲学者、詩人。安政二年（一八五五）筑前国大宰府の医者の子に生まれる。号は巽軒。幼時漢学について英学を学び、明治八年（一八七五）上京して東京開成学校予科を経て、明治十三年に東京大学文学部哲学科を卒業。文部省編集局、東京大学編修所を経て、明治十五年に東大助教となり東洋哲学史を講じた後、明治十七年よりドイツに留学。明治二十三年、帰国とともに帝国大学哲学科の教授となる。以後日本哲学界の指導者として当時の思想形成に大きな影響を与えた。大正十二年（一九二三）退官。この間、明治二十八年に東京学士院会員に選ばれたほか、文科大学学長、哲学会会長、教科書調査委員などを歴任、大正十四年には大東文化学院総長、貴族院議員に選任された。昭和十九年（一九四四）没。東洋哲学研究の主要著作としては『日本陽明学派之哲学』『日本古学派之哲学』『日本朱子学派之哲学』等がある。東京都立中央図書館と東洋大学附属図書館に旧蔵書が収蔵される。

「哲」の丸印は自著の奥付に捺された著者検印である。

「井上巽軒蔵書之印」（41） 『大英和辞典』（Ⅷ—1—152）
「哲」（12） 『日本学生宝鑑』（E—1—591—1—100—1）



梅原末治（一八九三—一九八三）
大正・昭和期の東洋考古学者。明治二十六年（一八九三）大阪府古市郡古市村に生まれる。号は河南。大正二年（一九一三）同志社普通学校を卒業後は京大考古学教室で資料整理に従事。内藤湖南、富岡謙蔵、浜田耕作らの指導で調査研究を始め、大正五年より朝鮮総督府古蹟調査嘱託・委員となる。大正十四年、欧米に留学。昭和四年（一九二九）帰国して東方文化学院京都研究所研究員兼京都帝大文学部講師となる。同助教を経て、昭和十四年から同教授。銅鐸・古墳・古鏡・中国青銅器の研究など、東洋考古学の研究基盤の確立に寄与した。昭和三十一年に京都大学を定年退官となる。昭和三十三年に天理大学おやさと研究所研究員を退職。この頃までに収集した考古資料（遺跡・遺物の実測図および写真など）数万点は、昭和四十年の和漢図書、昭和四十六年の洋図書と共に東洋文庫に寄贈されている。昭和五十八年（一九八三）没。『鑑鏡の研究』『銅鐸の研究』ほか多数の著書・論文がある。東北大学および慶応義塾大学文学部にも、寄贈コレクションが収蔵される。

〔梅原氏図書記〕（33）

* 『Die vorklassische Chronologie Italiens』

（一九一六—一九一八）

『Art treasures in the Royal Ontario Museum』

（一九一八—一九二〇）

『War damage to Korean Historical Monuments』

（一九二〇—一九二一）

『朝鮮国宝的遺物及古蹟大全』（梅一）ほか

荻原弘明（一九二一—一九八七）

昭和期の東洋史学者。大正十年（一九二一）宮崎県宮崎市旭通に生まれる。昭和十七年（一九四七）第七高等学校造士館卒業。昭和二十五年に東京大学大学院を修了、鹿児島大学鹿児島師範学校教授となる。昭和四十二年より鹿児島大学教授。我が国におけるビルマ史研究の先駆者で、東南アジア研究を推進する傍ら附属図書館の整備・充実に尽力した。昭和六十二年（一九八七）定年により退官。同年病没。欧文とビルマ語文献からなる旧蔵のビルマ関係資料は東洋文庫に購入整理されている。平成五年（一九九三）『東洋文庫所蔵荻原弘明文庫目録』が刊行された。



荻原文庫

〔荻原蔵書〕(21) 『Sanezin hu dhe』(BUne1)

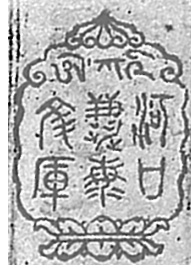
『What to read』(I1-C-111111)

『Report on the administration of Burma for the year
1933-34』(XVII-F181)

* 『Atlas of South-East Asia』(M167) ほか
『Sanezin hu dhe』(BUNe1)

『What to read』(I1-C-111111)

* 『Atlas of South-East Asia』(M167) ほか



河口慧海（一八六六—一九四五）
 明治・大正・昭和期の仏教学者。慶応二年（一八六六）樽桶製造業の善吉の長男として大阪府堺市に生まれる。本名は定治郎。僧名は慧海仁広。明治二十一年（一八八八）上京、東京哲学館に入学し哲学・宗教を学ぶ。明治二十三年、本所の黄檗宗五百羅漢寺で得度。西蔵大蔵經の入手のためチベット探險を志し、明治三十年インドに入った。明治三十八年に日本人として初めて鎖国下のラサに渡り、チベットを経て、日本及びチベットに向かい、大正四年（一九一五）帰国し貴重な資料を将来する。大正七年に東京根津宮永町に仏教宣揚会を設立し日曜学校を開き在家仏教を提唱。大正十五年より大正大学教授となり西蔵語を担当する。昭和十五年（一九四〇）資料の多くを東洋文庫に寄贈し、晩年は東洋文庫の研究室で『藏和辞典』編纂に努めたが果たせなかつた。昭和二十年（一九四五）東京世田谷の自宅で病没。著書は『河口慧海著作集』に纏められる。収集品のうち、東京大学・立正大学に經典類が、東北大学・東京国立博物館に仏具類が、国立科学博物館に植物標本が、それぞれ収蔵される。
 『河口慧海文庫』（38）

＊ 『Klong chen snying thig』（蔵外一ほか）
 『仏教宣揚会蔵書之印』（33）

『Klong chen snying thig』（蔵外一ほか）

『do rje gcod pa』（蔵外二一）

『Karikawāli』（XII-九-A-f-四）

『Siddhanta Kaumudi』（IX-一一-B-f-四八）

＊ 『The siddhanta kaumudi of Bhatto:』（XII-一一-B-f-四九）

『The Kathasaritsagara of Somadevabhata:』（XII-一一-F-七三）

『The Kathasaritsagara of Somadevabhata:』（XII-一一-F-七三）



神田家藏



神田喜一郎（一八九七—一九八四）昭和期の東洋学者。明治三十年（一八九七）京都市上京区の真宗篤信の家に生まれる。名は信暢。字は子衍・子充。幼は筑山・邨齋。通称は喜一郎。室名は佞古書屋・佞鉢羅室。号は少より蔵書家の祖父香巖の薫陶を受け、和漢の漢文学に精通し古典籍万般に通曉する。大正十年（一九二一）京都帝国大学文学部史学科を卒業。内藤湖南に師事。宮内省圖書寮嘱託を経て、昭和四年（一九二九）台北帝国大学助教授、のち教授。戦後は大谷大学・大阪市立大学でも教授を歴任し、京都大学や名古屋大学にも出講した。昭和二十七年より京都国立博物館館長。平安書道会会長、文化財保護委員会専門委員なども務める。研究対象は文学から美術まで中国文化史全般に及び、書誌学にも造詣が深い。多数の著書・論文は『神田喜一郎全集』に収められている。昭和五十九年（一九八四）京都市の自宅に没し、京都市下京区の東本願寺に葬られる。貴重書に富む旧蔵書は大谷大学図書館に遺贈された。

「神田家藏」印は神田家累代の使用印。それ以外の印は自著の奥付に捺された著者検印である。

- 〔喜〕(16) 『東洋学文献叢説』
- 〔神田家藏〕(40) (E1020・211カン01002) ほか
- 〔子孝顕碑〕(II16C1816)
- * 『綿津山人詩集』(IV21F1475)
- 〔靈芬館詩〕(IV21F1813)
- 〔大燈国師語録』(21B1b53) ほか
- 〔邨齋〕(15)
- 〔典籍劄記』(E1020・211カン01002) ほか
- 〔佞古〕(12) 『敦煌学五十年』(II31E162) ほか

阮克堪 (Nguyen Khac Khan 一九一〇—?)

サイゴン大学文学部ベトナム言語学科の教授。一九一〇年ハノイに生まれる。パリ大学を卒業。政府の文化活動に従事し、ベトナム国家図書館および国立公文書館の理事、ベトナムユネスコ国内委員長等を務めた。語学や文学などベトナム文化に関して数多く著述する。一九六七年から一九七三年にかけて東京外国語大学ベトナム語専攻の初代外国人教師を務める。『東洋文庫年報 昭和四一年度』のユネスコ東アジア文化研究センター事業活動の項に、来日外国人研究者の一人として名が挙げられている。

〔阮克堪〕(15)

〔李公新書〕(X-四一二五)

〔阮克堪(丸印)〕(11)

〔観音演歌大全〕(X-四一二七)

〔Prof. KHAM'S Privatelibrary〕(13)

〔Phap cu kinh (法句経)〕(V-R-九)

〔李公新書〕(X-四一二五)

* 〔観音演歌大全〕(X-四一二七)



虚心遺品之内

黑板勝美（一八七四—一九四六）

明治・大正・昭和期の日本史学者。明治七年（一八七四）

大村藩士族黑板要平の長男として長崎県彼杵郡下波佐見村に生まれる。号は虚心。明治二十九年に帝国大学文科大学国史科を卒業し同大学院に進む。田口卯吉のもとで『国史大系』の校訂に従事。東大史料編纂掛嘱託、東大文科大学講師を経て、大正八年（一九一九）教授となり古文書学を講じる。昭和四年（一九二九）より『国史大系』の新訂増補を手掛ける。昭和九年には日本古文化研究所を設立、ほかに日本考古学協会会長、史学会理事、朝鮮史編修会顧問などを歴任し、文化財の保存と日本史学の発展に尽くした。昭和二十一年（一九四六）東京都渋谷区の自宅に没し、池上本門寺に葬られる。著書に『国史の研究』『虚心文集』などがある。昭和五十年に旧蔵書二十七冊余が遺族より寄贈された。

「虚心遺品之内」（31）

『スーフィー聖者画帖』（P1R1三八）

* 『好太王碑等調査日誌』（X151110四三）

『古跡委員会議案ほか』（X151110三三）

『朝鮮史蹟写真』（X151M1g100二）



黒川真頼（一八二九—一九〇六）

明治期の国学者。文政十二年（一八二九）上野国山田郡桐生の機業家金子吉右衛門治則の長男として生まれる。幼名は嘉吉。通称は寛長、のち真頼。号は荻斎・万里・墨水。黒川春村に師事して和歌・国学を学び、慶応二年（一八六九）請われて師の学統を継ぐ。維新後は官途につき明治二年（一八六九）大学少助教を拝命、ついで文部省・教部省・元老院・博物館・内務省など多方面に関わる。帝国大学・東京美術学校・東京音楽学校・高等師範学校に教鞭を揮い、明治二十六年より帝国大学教授。また、帝室博物館学芸委員、宮内省御歌所寄人などを歴任した。『国事類苑』編纂にも携わる。明治三十九年（一九〇六）浅草小島町の自宅に没す。墓は東京谷中の天王寺。文学・語学・歴史・有識・美術など広汎にわたる著作は『黒川真頼全集』に纏められている。春村以来蒐集の龐大な蔵書は、四男で東京帝国大学教授の真道・孫の真前に受け継がれる過程で四散した。旧蔵書は実践女子大学・国学院大学・明治大学・ノートルダム清心女子大学などが所蔵する。

〔黒川真頼〕（19）

『茅窓漫録』（II—IE—二七五）

〔黒川真頼蔵書〕（44）

『茅窓漫録』（II—IE—二七五）

黒田源次（一八八六一一九五七）

大正・昭和期の美術史家。明治十九年（一八八六）熊本に生まれる。本姓有馬。号は喪志亭。心理学を専攻し明治四十四年に京都帝国大学文科大学を卒業。大学院に進み、大正三年（一九一四）京大医学部副手、生理学を学ぶ。大正九年より同医学部講師を務め、大正十三年には文部省海外研究生としてドイツに留学。大正十五年に満洲医科大学教授となり生理学教官を担当する。昭和六年（一九三一）から昭和九年まで再度欧米に留学、この間ベルリンの日独文化協会長を務めた。その後、満洲教育専門学校教授を兼任、満洲医科大学図書館長・同医学陳列館長などを歴任する。戦後は東京帝室博物館嘱託を経て昭和二十七年から奈良国立博物館の初代館長。奈良国立文化財研究所長を兼任する。昭和三十二年（一九五七）没。主な編著書に『上方絵一覧』『長崎系洋画』などがある。掲出の『シーボルト文書』とは、ドイツのベルリンにあった日本学会（一九二六―一九四五）がかつて所蔵していたシーボルト手稿を多数ふくむ独得の資料群のこと。東洋文庫が架蔵しているのはその写真複製（フォトスタット一万一千枚）で、昭和十一年に日独文化協会より寄贈されたものである。

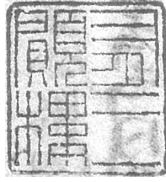
〔黒田源次〕（14）

〔伯林孤客〕（24）

〔シーボルト文書〕（XVII―IB―16）

〔シーボルト文書〕（XVII―IB―16）





幸田成友（一八七三—一九五四）

明治・大正・昭和期の経済史学者。明治六年（一八七三）幸田成延の子として東京府神田区に生まれる。齋号は三願書屋。兄に露伴・成忠、姉に幸田延、妹に安藤幸がいる。明治二十九年に帝国大学文科大学史学科を卒業。明治三十四年以来『大阪市史』編纂主任。その後、京都帝国大学、慶応義塾大学、東京商科大学などで講師・助教授を歴任する。昭和三年（一九二八）オランダに留学。昭和五年より東京商科大学教授。江戸時代の江戸・大坂に関する社会経済史研究を本領としたが、史伝・書誌学・近世文化交流史など研究領域は多岐にわたる。その業績は『幸田成友著作集』に収められている。昭和二十九年（一九五四）没。愛書家としても知られ、その旧蔵書は大半が慶応義塾大学図書館の幸田文庫に、一部が一橋大学に現存する。

「幸田成友」の印は貼付の紙片に捺されている。

「幸田成友」(33)

『伊勢物語聞書』(三二B-a九)

「有三願楼」(26)

『鉄山和尚語録』(二一C二四)

古城貞吉（一八六六—一九四九）

明治・大正・昭和期の漢学者。慶応二年（一八六六）熊本に生まれる。号は坦堂。幼時より竹添井々の塾で漢学を修める。明治三十年（一八九七）東京日日新聞社に入社し上海に赴任。ついで北京に移り、明治三十三年の北清事変に際しては北京の日本公使館での籠城に加わっている。翌年に帰国し東洋協會殖民専門学校講師を経て、明治三十九年より東洋大学教授。日本大学・立教大学・大東文化学院・慶応義塾大学の講師を務める。昭和四年（一九二九）設立の東方文化学院東京研究所の研究員、のち評議員として研究と後進の指導に当たる。昭和二十四年（一九四九）東京文京区関口台町の自宅に没す。墓は熊本市本妙寺裏花園墓地にある。蔵書二万八千冊は、没後に永青文庫が購入し、のち慶応義塾大学に寄託され斯道文庫に現蔵する。著書に『支那文学史』、編著に『肥後文献叢書』がある。



「古城文庫」(29)『合類書籍目録大全』(II-1-1-1087)



幣原坦（一八七〇—一九五三）

明治・大正・昭和期の東洋史学者。明治三年（一八七〇）堺
県茨田郡門真村の旧家に生まれる。幣原新治郎の長男。幣原
喜重郎の兄。明治二十六年に帝国大学文科大学国史科を卒業、
沖繩の歴史研究に志す。鹿児島高等中学校造士館教授、山梨
県立中学校校長、東京高等師範学校教授を歴任して、明治三
十八年には韓国政府学政参与官となる。以後もっぱら朝鮮史
の研究をすすめ、朝鮮史開拓者の一人となった。明治四十三年
より東京帝国大学教授を兼任。大正二年（一九一三）広島
高等師範学校校長、大正九年に文部省図書局長を経て、昭和
三年（一九二八）台北帝国大学創立と共に初代総長に任ぜら
れる。戦後の昭和二十一年には枢密顧問官となった。昭和二
十八年（一九五三）大阪に病没する。墓は門真市御堂町の願
得寺。著書に『南島沿革史論』『朝鮮教育論』などがある。
朝鮮在職中から朝鮮関係の古書の収書に努め、昭和十六年
はその尽く三百四十部千五百冊を東洋文庫に寄贈する。

〔幣原坦印〕（26）

〔懲毖録〕（VII-二八〇三*）

* 〔金陵集〕（VII-四一六八*）ほか

〔幣原図書〕（26）

〔広史〕（XI-四一B-五四）

〔殊号事略後編〕（X-五H-a-〇二四）

* 〔九送使公貿易次第〕（XIII-五-C-一八）ほか

〔幣原図書（丸印）〕（44）

* 〔疆域全図〕（VII-二二二四）

〔両朝遺乘〕（VII-二二二六）

〔幣原文庫〕（28）

〔懲毖録〕（VII-二八〇三*）



高木敏雄（一八七六—一九二二）
 大正期の神話学者。明治九年（一八七六）熊本県菊池郡西寺村に生まれる。明治三十三年に東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業、第五高等学校教授を経て明治四十二年より東京高等師範学校教授となる。大阪外国語学校教授などを歴任。比較神話学の方法論により日本神話を研究する。大正二年（一九一三）柳田国男と『郷土研究』を創刊している。著書に『日本神話伝説の研究』などがある。大正十一年（一九二二）没。旧蔵書は主事石田幹之助により東洋文庫に購入された。

〔高木〕(11)

『Mythologie des Buddhismus in Tibet und der Mongolei』
 (VII—五—A—五九)

* 『Vedic mythology』(XII—1—1—F—1—1)

〔高木神話文庫〕(30)

* 『Popular tales and fiction』(I—五—1—九)

『Mythologie des Buddhismus in Tibet und der Mongolei』

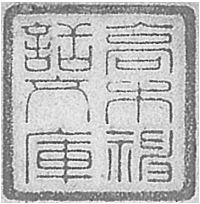
(VII—五—A—五九)

『Tibetan tales』(VII—七—五)

『The Jataka』(IX—1—0—C—1—1—1)

『Vedische mythologie』(IX—1—1—F—1—1)

『Vedic mythology』(IX—1—1—F—1—1)



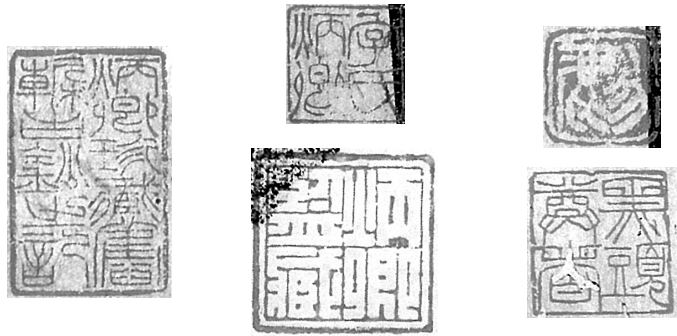


富岡謙蔵（一八七三—一九一八）

明治・大正期の考古学者。明治六年（一八七三）京都に生まれる。号は桃華。父鉄斎に就いて幼少から漢籍の素養を受け、また絵画の鑑識を志した。明治三十六年より京都帝国大学図書館嘱託。明治四十一年には京都帝国大学文科大学の講師となり、東洋史・金石学・古鏡の研究に携わる。大正七年（一九一八）没。著書は『古鏡の研究』など。親子二代の蒐書「富岡文庫」は和漢洋多方面にわたる。

「桃華齋」（22）

『広韻』（XI—二—一〇）



内藤湖南(一八六六—一九三四)

明治・大正・昭和期の東洋史学者。慶応二年(一八六六)陸奥国鹿角郡毛馬内に盛岡藩の陪臣儒者内藤調一の次男として生まれる。名は虎次郎。字は炳卿。号は湖南・黒頭尊者。明治十八年(一八八五)秋田師範学校を卒業。しばらく小学校教員を務めた後、明治二十年に上京して大内青巒のもとで『明教新誌』の編集にあたる。以後、雑誌『日本人』、『三河新聞』、『大阪朝日新聞』、『台湾日報』、『万朝報』等の記者として言論界で活躍した。明治四十年に京都帝国大学文科大学に史学科が開設されるに際して講師を迎えられる。明治四十二年より同教授となり東洋史講座を担当、多くの人材を輩出せしめた。かたわら、典籍について深い蘊蓄を持ち多くの善本を蒐集する。羅振玉・王国維等清末の学者と親交を持ち、書画の鑑識・漢詩文の作者・書道家としても一流であった。晩年は京都府相楽郡瓶原に移り住み、齋号を恭仁山莊と称した。昭和九年(一九三四)没。京都市左京区鹿ヶ谷法然院に葬る。主な業績は『内藤湖南全集』に纏められている。旧蔵書は、その大半が関西大学図書館に、善本類が武田科学振興財団杏雨書屋に、満蒙関係資料が京都大学人文科学研究所に、中国史関係資料が大阪大学に、それぞれ収蔵されている。

〔虎〕(18) 〔分類合璧画像句解君臣故事〕(二一B a 一)

〔黒頭尊者〕 〔蔵乘法数〕(二一C b 一)

〔字炳卿氏〕(1922) 〔分類合璧画像句解君臣故事〕(二一B a 一)

〔炳卿鑑蔵〕(27) 〔分類合璧画像句解君臣故事〕(二一B a 一)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

〔炳卿鑑蔵〕(27) * 〔崔忻并記〕(二一六 C 一—二)

内藤耻叟（一八二七—一九〇三）

幕末・明治期の歴史学者。文政十年（一八二七）水戸藩士美濃部又三郎の次男として常陸国水戸に生まれる。のち内藤家の養子に入り弘化三年（一八四六）家督を相続する。名は正直。字は大道。通称は弥大夫。号は耻叟・碧海。天保十二年（一八四一）藩校弘道館に入り会沢正志斎・藤田東湖に師事する。元治二年（一八六五）水戸弘道館教授。安政六年（一八五九）藩の内訌に禍して隠居を命ぜられ耻叟と号す。有為転変の後、慶応四年（一八六八）水戸を離れ本姓を秘し東北地方を転々とし、明治三年（一八七〇）米沢で山形史生となる。その後は上京して大蔵省や東京府に勤め、明治十一年に小石川区長となる。群馬県中学校長・東京大学文学部講師などを経て、明治十九年より帝国大学文科大学教授となる。『古事類苑』の編纂など修史事業にも携わる。徳川時代の制度文学研究に務め博覧強記をもって知られた。明治三十六年（一九〇三）没。墓は東京谷中霊園。著書に『安政紀事』『徳川十五代史』等がある。



『内藤耻叟』(14) 『長禄江戸図』(三二H—d—r—r—1) (一一)

『内藤耻叟(破円)』(14)

『寛永九年刊江戸図写本』(三二H—d—r—r—1) (一一)



中山久四郎（一八七四—一九六一）

大正・昭和期の東洋史学者。明治七年（一八七四）長野県北佐久郡馬瀬口村に生まれる。本姓は中山。中村家を嗣ぐ。明治三十二年に東京帝国大学文科大學漢学科を卒業。大学院に進み、明治三十四年ドイツに留学。帰国後は、広島高等師範学校教授・東京高等師範学校教授・東京帝国大学文科大學講師・第一高等学校講師などを歴任し、東大史料編纂官を兼任する。昭和四年（一九二九）東京文理科大学教授となり、中山姓に復し東京市本郷区駒込に住まう。昭和三十六年（一九六一）没。東西交渉・東洋文化史を研究し、著書は『読史広記』など多数がある。都立中央図書館特別買上文庫中に旧蔵書の一部が収蔵される。日本人漢詩文の簿冊が多い。東洋文庫には昭和四十三年に遺族より旧蔵書の一部が寄贈された。夥しい書入れが特徴である。

「中山（大）」や「中村久四郎」の丸印は自著の奥付に捺された著者検印である。

「中山」（10）『孫文ヲ中心トシタル中華民國最近世史』

（X一六一抜一五九）

「中山（大）」（11）『日本文化と儒教』（V一九一E一A一三）

「中山氏蔵書之記」（22）『読史広記』（II一七）

*『朱舜水先生七十寿』（X一六〇B一五一一〇〇一）ほか

「中村久四郎」（15）『新編外国歴史教科書 東洋之部』

（E一三七五・九三二一ナカ〇一〇〇〇一）

「中村究史楼」（13）『清朝學術思想史』（X一六六抜一七七）



新渡戸稲造（一八六二—一九三三）

明治・大正・昭和期の農業経済学者。文久二年（一八六二）盛岡藩勘定奉行新渡戸常訓の三男として盛岡に生まれる。幼名は稲之助。明治十四年（一八八一）札幌農学校を卒業後、東京大学に進むが明治十七年に中退、アメリカ・ドイツの諸大学で農業経済学を学ぶ。明治二十年、札幌農学校助教。札幌農学校教授・台湾総督府技師などを経て、明治三十六年より京都帝国大学教授。ついで、第一高等学校校長・東京帝国大学教授・東京女子大学初代学長を歴任。大正九年（一九二〇）から国際連盟事務局次長を務める。昭和八年（一九三三）太平洋問題調査会会議に日本代表団団長として出席するためカナダに渡り、その地で病没。墓は東京都府中市の多磨墓地。『農業本論』『武士道』『修養』等の著書がある。旧蔵書は、十和田市立新渡戸記念館、北海道大学附属図書館、東京女子大学図書館、東京大学経済学部に収蔵される。

〔新渡戸寄贈〕（63）

『費唐君提交上海公共租界工部局報告書第一巻摘要訳文』（四四三〇）

〔新渡戸寄贈（小）〕（30）

* 『The Empire of Japan』（XVI—1—E—1—135）

『Une campagne sur les cotes du Japon』（XVII—7—F—1—11）

〔新渡戸章〕（23） 『Contes Japonais』（XVII—1—H—1—17）

「新渡戸図書」

LIBRARY OF INAZO & MARY NITOBE】(28)

* 『Bibliographie japonaise』(XVII-1-1A-18)

『The Empire of Japan』(XVII-1-E-1135)

『De openstelling van Japan』(XVII-7-F-11)

『Le Japon』(XVII-7-F-113)

『Justo Ueundono, Prince of Japan』(XVII-1-O-E-b-115)

「東京市小石川区小日向台町一ノ七五新渡戸」(31)

『Statement of the Services of Sir Stamford Raffles』

(IX-1-C-111)

『Inazo Nitobe』(28)

『Bijdrage tot de kennis van het Japansche Rijk』

(XVII-1-a-1134)

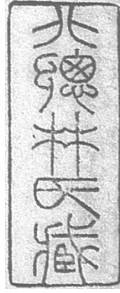
『OTA INAZO』(20)

『Le Japon』(XVII-7-F-111)



Inazo Nitobe





林泰輔（一八五四—一九二二）

明治・大正期の歴史学者。安政元年（一八五四）下総国香取郡常盤村の素封家に生まれる。名は直養。字は浩卿。号は進齋。若くして並木栗水に朱子学を学ぶ。明治二十年（一八八七）帝国大学文科大学古典講習科を卒業。第一高等中学校嘱託、山口高等中学校助教授、東京大学文科大学助教授、東京高等師範学校講師を経て、明治四十一年より東京高等師範学校教授となる。朝鮮史研究の先覚者で、のち中国古代史に転じる。甲骨文字の研究では開拓者としての功績が大きい。地方教育に関心を持ち郷党のために蒐集の書籍をもって「杜城図書館」を創設した。大正十一年（一九二二）没。著書に『上代漢字の研究』『朝鮮通史』などがある。旧蔵書のうち経書を中心とする漢籍が筑波大学附属図書館に、和漢書が千葉県立中央図書館に、自筆稿本類が慶応義塾大学斯道文庫に収蔵されている。東洋文庫は、大正十三年に遺族より購入した甲骨卜辞片六百余片および甲骨関係の蔵書等五十余部を蔵する。

〔北総林氏蔵〕（44）

『石経考』（I—1—C—15）

*『説文解字句読』（I—9—B—147）

『嶧山刻石残字』（II—1—C—189—4）

『碧落碑』（II—1—C—189—5）ほか

藤井乙男（一八六八—一九四五）

明治・大正・昭和期の国文学者。慶応四年（一八六八）淡路国津名郡洲本に生まれる。号は紫影。明治二十七年（一八九四）帝国大学国文科を卒業。第四高等学校・第八高等学校の教授、京都帝国大学の講師を経て、明治四十四年より京都帝国大学教授。のち広島文理大学にも出講した。近世文学を専攻し、戯曲・小説・俳諧の諸分野を広く研究した。正岡子規に師事し句作も嗜み、四高在職当時の金沢では北声会を主宰した。昭和二十年（一九四五）没。著作を網羅した『藤井乙男著作集』、句集『かきね草』がある。

「紫影」（15）

『かまた』（三一A—d—1—1）





藤井尚久（一八九四—一九六七）

昭和期の医史学者。明治二十七年（一八九四）富山県婦負郡千里村に藤井登の長男として生まれる。大正十年（一九二二）東京帝国大学医科大学を卒業。大学附属病院の医局員となり、入沢達吉・呉健の指導のもと内科学の研究を続ける。そのかたわら東京医学専門学校講師、東京市立広尾病院内科科長などを経て、昭和六年（一九三一）東京医学専門学校教授となる。昭和十七年に帝国学士院より明治前日本科学史の編纂委員を委嘱され、以来わが国の医学文化の史的研究に努める。著書に『明治前本邦内科史』等がある。昭和十九年より松原病院院長。昭和三十六年から清瀬病院院長。昭和四十二年（一九六七）没。蔵書家としても知られ、昭和三十二年には蒐集の和漢洋医学書およそ一千八百部を東洋文庫に寄贈された。昭和四十四年に『藤井文庫目録』が刊行されている。

〔藤井〕(11) 『Ontleedkundige tafelen』(O—D—六七)

* 『博物新編』(XV—九—一〇〇六) ほか

〔藤井尚久〕(14) * 『English and Japanese dictionary』

(XVI—二—C—七六) ほか

〔藤井尚久(楢円)〕(20) * 『博物新編』(XV—九—一〇〇六)

〔女刑屍解剖之図〕(五) ほか

〔藤井蔵〕(24) 『Ontleedkundige tafelen』(O—D—六七)

〔本草綱目〕(III—六—B—二四)

* 『シーボルト先生渡来百年記念論文集』

(X—七—一六) ほか

藤田豊八（一八六九—一九二九）

明治・大正期の東洋史学者。明治二年（一八六九）徳島県馬郡郡里村に生まれる。名は豊八。号は劍峰。明治二十八年に帝国大学文科大学漢文科を卒業。東京専門学校および哲学館に教鞭を執り雑誌「江湖文学」発刊。明治三十九年に渡清して羅振玉らと交わり、上海東文学社の教習（一八九八）、清広総督の教育顧問（一九〇二）、蘇州の師範学堂総教習（一九〇五）、北京の農科大学の総教習（一九〇九）などを歴任、清末の新学勃興に貢献した。その間に「慧超往五天竺国伝箋釈」（一九〇九）、「島夷志略校注」（一九一一）を公にして東洋史学に不朽の地位を築いた。帰国後は早稲田大学教授・交渉史の研究』に取められている。帰国後は早稲田大学教授・東京帝国大学教授などを歴任し、昭和三年（一九二八）台北帝国大学教授・文政学部長に補せられる。昭和四年（一九二九）東京の自宅に病没。東京多磨霊園に葬られる。蔵書に富み、中でも宋版明補刻本の『魏書』などは稀覯本といわれる。このうち漢籍千七百余部は昭和五年に一括して東洋文庫に寄贈され、その概要は『藤田文庫目録』に確認できる。ほかに、清代詩文集が大府立中之島図書館に、洋書が台北帝国大学に取められている。

掲出の『東夷考略』は見返しに羅振玉氏手書の識語があり、その交遊を物語る。

「藤田鏡手蔵書之記」（41）

* 『東夷考略』（II—1—N—1—16）
『魏書』（XI—1—1—1）ほか





松井簡治（一八六三—一九四五）

明治・大正・昭和期の国文学者。文久三年（一八六三）銚港神社の神官宮内嘉雄（号君浦）の次男として下総国海上郡銚子に生まれる。号は刀水・碧湾。明治十五年（一八八二）高崎藩士松井清の養嗣子となる。明治二十三年に帝国大学文科教育学科を卒業。明治二十五年より学習院教授。このころより国語辞典の編纂を志し、資料とすべき古書籍の蒐集を始める。東京高等師範学校教授（附属図書館長を兼務）、東京文理科大学教授などを歴任。この間、独力で編纂作業を進め、大正八年（一九一九）『大日本国語辞典』を完成した。昭和二十年（一九四五）疎開先の栃木県足尾町に没す。物語・歌書・有識故実・古辞書など広範囲に及ぶ旧蔵古典籍一万七千余冊は、昭和十年に一括して静嘉堂文庫へ収められた。

「松井氏蔵書章」（35）

『奈万之奈』（Ⅷ—一—一〇〇四）

物集高見（一八四七—一九二八）

明治・大正期の国語学者。弘化四年（一八四七）豊後国速見郡杵築城下に国学者物集高世の長男として生まれる。初め素太郎、のち善五郎と称す。号は鶯谷、埋書居士、菴園など。幼少より漢学・国学を学び、慶応元年（一八六五）には長崎に遊学して洋学・英語も修めた。玉松操に入門し、また平田鏡胤に国学を学ぶ。明治維新後は新政府に出仕し、明治三年（一八七〇）神祇官宣教史生となり、教部省・文部省などを経て明治十九年より帝国大学教授となる。学習院教授などを歴任。『言文一致』『日本大辞林』など多くの編著書がある。大正十三年（一九二四）蔵書の多くを手放し翌年杵築に帰郷した。昭和三年（一九二八）没。墓は大分県杵築市南台の養徳寺。



「物集文庫」（27）

『沙石集』（三一A—b—四三）

柳田国男（一八七五—一九六二）

大正・昭和期の民俗学者。明治八年（一八七五）兵庫県神東郡田原村辻川に儒学者松岡操の六男として生まれる。国文学者の井上通泰は三兄。明治三十四年に大審院判事柳田直平の養嗣子となる。明治三十三年に東京帝国大学法科大学を卒業、農商務省に入り法制局参事官・内閣書記官記録課長などを経て貴族院書記官長。ついで大正九年（一九二〇）朝日新聞社の客員となり論説委員を務める。この間に高木敏雄と共同で民俗学雑誌『郷土』を創刊する。昭和二十二年（一九四七）成城の自宅の書斎を開放して民俗学研究所を設立し、昭和二十四年には日本民俗学会を創設した。昭和二十六年より国学院大学大学院教授。昭和三十七年（一九六二）没。川崎市生田の春秋苑に埋葬される。著作の多くを収録する『定本柳田国男集』がある。昭和十九年には慶応義塾大学に方言関係資料が、昭和三十七年には成城大学に民俗学関係資料が收藏された。また書斎「喜談書屋」は飯田市に移築保存されている。



〔何仮南面百城〕（35）

『寛永行幸記』（三・A・g・1）



山根幸夫（一九二一—二〇〇五）

昭和期の東洋史学者。大正十年（一九二一）兵庫県神崎郡越知谷村に山根貫道の長男として生まれる。昭和二十二年（一九四七）東京帝国大学東洋史学科を卒業。東洋大学・青山学院大学・明治大学などでの講師を経て、昭和三十六年より東京女子大学教授となる。昭和二十九年から東洋文庫研究員。古典研究会の発足（昭和三十八年）以来の会員でもあった。昭和四十二年には明代史研究会を設立し、東洋文庫明代史研究室を拠点に東洋史を中心とした日中学術交流にも尽力する。東京大学・早稲田大学・日本大学など多くの大学で講師を担当した。平成十七年（二〇〇五）没。昭和四十九年より独力で編集・刊行していた『明代史研究』も三三号で終刊となる。著書は『東方文化事業の歴史』など多数、また『増訂日本現存明人文集目録』ほか数多くの文献目録や書目類の編纂がある。

「山根幸夫」印二顆は献呈署名に捺したもの。いずれも山本達郎旧蔵書である。

「山根幸夫」(19) 『過ぎ来し方』(XV—1—148)

「山根幸夫(陰文)」(22) 『天安社史』(Y—O—24—1—D—1)

「山根幸夫蔵書」(30) 『阪神・淡路大震災における外国人住民と地域コミュニティ』(XIII—5—1—29)

「山根蔵書」(24) 『コンピューターによる北京口語語彙の研究

第一冊：資料編』(VIII—6—7—2)



山本達郎（一九一〇—二〇〇一）

昭和期の東洋史学者。明治四十三年（一九一〇）東京に生まれる。旧姓は松村。政治家の山本達雄は母方の祖父で養父。昭和八年（一九三三）東京帝国大学東洋史学科を卒業。昭和二十四年より東京大学教授。南方史研究会を組織し、国際基督教大学でも教授として東南アジア史を講じる。昭和五十年、国際哲学人文科学協議会会長。昭和二十八年から東洋文庫の評議員・理事を歴任し、その間に近代中国研究委員会を発足させている。初期の蔵書は昭和二十年の空襲により灰燼に帰してしまいが、戦後あらためて再開した蒐集は貴重書を含む二万冊に達する。平成十三年（二〇〇一）没。著書に『安南史研究一』ほかがある。旧蔵書は生前からの希望により東洋文庫に収められ、平成二十四年に『山本達郎博士寄贈書目録』が刊行されている。

「達郎」印は猷呈署名に捺したもので、掲出の『山本達郎古稀記念録』は森雅夫旧蔵書である。

〔山本達郎蔵書〕(11)

〔山本達郎蔵書（長方印）〕(23) 〔Urbs et orbis〕(Y-I-16-11) ほか

〔黎朝刑律〕(X-1-1-155)

〔山本達郎蔵書記〕(25)

* 『Hmannan Maha Yazawin daw gyi』(Y-B-U-H-11)

『Y THU'ONG-KIET』(Y-V-H-11)

『唐卜天寿抄写鄭氏注論語』(VI-1-194) ほか

〔達郎〕(19) 〔山本達郎古稀記念録〕(X-1-1-17)



吉田澄夫（一九〇二—一九八七）

昭和期の国語学者。明治三十五年（一九〇二）生まれ。埼玉
大学・武蔵野女子大学教授。昭和六十二年（一九八七）没。

自著に『古典拾葉』『天草版金句集の研究』などがある。蔵
書は散逸した。

「吉田澄夫」（30） 『金剛略疏』（Ⅲ—二—E—八〇九）

* 『過去莊嚴劫千仏名録』（XI—三—A—c—一六四）



吉田東伍（一八六四—一九一八）

明治期の歴史地理学者。元治元年（一八六四）越後国北蒲原郡保田村の名望家簗野木七の三男として生まれ、のち蒲原郡大鹿新田の吉田家を嗣ぐ。号は落城、楽浪逸民など。新潟学校中等部を中退後、明治十六年（一八八三）小学校教員となる。那珂通世の『年代考』に感銘を受け史学を志す。明治二十三年、北海道庁書記。明治二十五年には読売新聞社に招かれ上京、落語生の筆名で史論を発表した。明治二十八年に記者として日清戦争に従軍。この頃より地名研究に没頭し明治四十四年に独力で『大日本地名辞書』を完成する。東京専門学校講師を経て、明治四十年より早稲田大学教授となる。のち早稲田大学の理事を兼ねるも、学内抗争に疲れ大正七年（一九一八）没す。日本音楽史にも精通し特に能楽に造詣が深く『世阿弥十六部集』の校注は近代能楽研究の出発点となった。稿本および旧蔵の朝鮮本は早稲田大学に、そのほかの蔵書は新潟県立図書館に寄贈された。旧蔵朝鮮本中には対馬藩宗家文庫本と思しきものが散見される。

〔楽浪書齋〕（37）* 〔新增東国輿地勝覽〕（XI—四—B—一五）

〔治隠先生言行拾遺〕（XI—四—B—二二）

〔亨齋先生詩集〕（XI—四—B—二二）

〔大家文会〕（XI—四—B—二八）

〔脾胃論〕（XI—四—B—三五）

〔陽谷先生集〕（XI—四—B—四四）

〔鶴峯先生文集〕（XI—四—B—四七）ほか



和田維四郎（一八五六—一九二〇）

明治・大正期の鉱物学者。安政三年（一八五六）若狭国小浜に藩士の子として生まれる。号は雲村。貢進生として上京。

明治六年（一八七三）開成学校で鉱物学を学ぶ。明治八年より文部省学務課に出仕。明治十五年には地質調査所が設立されると初代所長になった。ドイツに留学し明治十八年に帰国、東京大学教授となる。鉱山局長を兼務、また八幡製鉄所長官も務める。わが国の近代鉱物学の創始者である。大正九年（一九二〇）東京市牛込区市ヶ谷薬王寺町の自宅で病没。墓所は高野山にある。晩年は古版本・古地誌などの蒐集に傾注し、蔵書家としても知られ『嵯峨本考』『訪書余録』などの著書がある。

〔雲村文庫〕（41）

〔伊曾保物語〕（三―A―d―四）ほか

〔雲村文庫（双郭）〕（39）

『唐三体詩絶句』（Ⅶ―四―C―一―〇―四―一）

『徒然草』（三―B―a―二―〇）

『徒然草』（三―B―a―二―一）

* 『保元物語』（三―B―a―二―三）

『保元物語』（三―B―a―二―四）

『方丈記』（三―B―a―二―八）

『歌仙』（三―B―b―五）

『本朝古今銘尽』（三―B―c―五）

後水尾院勅版

〔後水尾院勅版〕(30)
〔後陽成帝勅版〕(30)

後陽成帝勅版

〔光悦本〕(24)
〔嵯峨本疑似本〕(25)

光悦本

嵯峨本
疑似本

〔皇宋事宝類苑〕(三A一—二)
〔古文孝經〕(三Aa一六)
〔孟子〕(三Aa—一九)
〔新刊錦繡段〕(三Ae—二)
* 〔勸学文〕(三Ae—八)
〔日本書紀〕(三Ag—五)
〔方丈記〕(三Ba—二六)
* 〔徒然草〕(三Ba—二〇)
〔徒然草〕(三Ba—二二)

和田英松（一八六五—一九三七）

明治・大正・昭和期の国史・国文学者。慶応元年（一八六五）備後国沼隈郡鞆町に和田五平の子として生まれる。明治二十一年（一八八八）帝国大学文科古典講習科卒業。『古事類苑』編修嘱託などを経て、明治三十二年より学習院教授となる。明治四十年に東京帝国大学史料編纂所史料編纂官。臨時御歴代史実考査委員・帝室制度史調査員・国宝保存会委員などを勤め、二松学舎専門学校教授などを歴任する。国文学研究における考証学の確立に貢献した。昭和十二年（一九三七）没。墓は東京豊島区駒込の染井墓地。著書に『本朝書籍目録考証』『国書逸文』がある。

「和田蔵書」（14）

『方丈記』（三一B・a・二八）

